



■研究課題名：自閉スペクトラム症の偏食に対する応用行動分析的アプローチ
■研究者名、所属：趙 成河、人間系障害科学域
■研究分野：応用行動分析、自閉スペクトラム症、場面緘黙、韓国幼児特殊教育
■キーワード：偏食、先行子操作に基づいた介入、実施可能性

#### 【研究の背景・目的】

自閉スペクトラム症児（Autism Spectrum Disorders: ASD）には知覚過敏や同一性保持などの特徴があり、そのため偏食の態様は様々であり、食物の種類、食感、ブランド、温度、さらに色についても強いこだわりを示すことが報告されている。ASD 児や広汎性発達障害児と定型発達児の食生活及び食行動を比較したいくつかの研究では、偏食を含む摂食問題は定型発達児より ASD 児や広汎性発達障害児に多く見られることが明らかになっている。本研究では、ASD 児とその保護者や教師等を対象とした ASD 児の偏食に対する事例研究を整理して研究動向および制限を把握し、今後の課題について検討することを目的とした。

#### 【研究の概要・成果等】

応用行動分析学に基づくアプローチは、偏食に対してもその有効性が示されている。これまでは結果操作に基づく介入、特に逃避消去法は、偏食に関する研究において欠かせない要素として認識されていた。しかし、逃避消去法は高度な専門技術を必要とし、自然場面における般化および維持という点で望ましい効果を期待できない可能性があり、また、親に受け入れられにくい可能性もある。この介入方法に対する親の社会的受容性が低いことは、自然場面（家庭や学校場面等）における般化や維持に影響を及ぼす可能性がある。逃避消去法を家庭や学校場面で実施する場合には、いくつかの課題がある。逃避消去法に伴う食事時の問題行動の生起は、親にとってもう一つの懸念事項であり、負担になる可能性が高い。先行研究のレビューの結果、対象者数は1名が最も多く、年齢は3～6歳が最も多かった。摂食問題の中では摂食拒否より偏食が多く、食事時の問題行動を有している場合が多かった。介入者はセラピストが最も多く、介入場所は家庭と臨床場面が多かった。しかし、家庭場面はクリニック等の臨床場面でトレーニングをした後で実施されることが多かった。標的食物は野菜が最も多く、独立変数（介入方法）は分化強化と逃避消去法が最も多く、次いで刺激フェイディング法が多かった。しかし、先行子操作に基づく介入のみの介入は5件と少なく、介入の多くが結果操作に基づく介入、または結果操作と先行子操作に基づく介入の組み合わせであった。多くの研究で社会的受容性評価を実施しておらず、般化のデータが載っていない場合が多かった。

【期待される意義や波及効果等】

ASD の偏食は栄養摂取の面で、本人だけでなく家族にも影響を及ぼす可能性があることを示唆している。子どもがもつ感覚や認知の問題だけでなく、対人関係やコミュニケーションが上手くいかないため、保護者にとっても偏食は対応が難しく、育児上の困難さが高じて、未学習や誤学習を助長させてしまうこともよく見られる。したがって、早期から家庭での療育面の指導や治療教育の現場で適切な摂食指導をすることが望まれる。

本研究の結果を踏まえ、日常生活場面において保護者や教師等が実施できる実施しやすい介入方法について工夫し、実践の場で適用していくことが課題として今後の課題として残っている。

【主な論文・著書・ホームページ等】

- 1 趙 成河、園山繁樹（2018）自閉スペクトラム症児の偏食に対する食物同時提示法の適用. 自閉症スペクトラム研究, 15(2), 37-50.
- 2 Sungha Cho and Shigeki Sonoyama（2017）Parent-implemented Liquid Fading to Establish Milk Consumption in a Child with Autism Spectrum Disorder. Journal of Special Education Research, 6(1), 45-53.